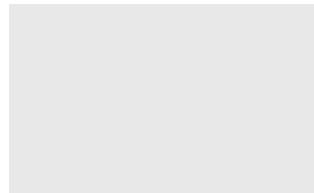


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



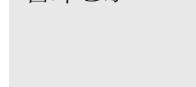
廃仏毀釈とその前史

檀家制度・民間信仰・排仏論

圭室諦成

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

書肆心水



磨仏毀釈とその前史

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第一部 檀家制度の重圧	14	序 11
第一章 新寺院機構の確立	14	
第二章 江戸幕府の宗教政策	24	
第三章 諸藩の財政と寺院	32	
第二部 民間信仰の繁昌・組織化	48	
第一章 宗教界に現れた新動向	48	
第二章 宗教寄生者群の登場	53	
第三章 修驗道の急旋回	60	
第四章 教派神道の誕生	70	
第三部 排仏論の展開	86	
第一章 儒者の排仏論	86	
第二章 懐徳堂の排仏論	97	

附
錄

近世宗学の特質 『日本仏教史概説』 第一五章

第一節 教説の定型化 207

207

第一節	教説の定型化	207
第二節	異義異説の禁圧	215
第三節	宗学者点描 (一)	234
第四節	宗学者点描 (二)	223

第四部

廃仏毀釈の概観 141

141

第一章	神仏分離令の發布	141
第二章	廃仏毀釈の実況	154
第三章	封建的領有地の整理	175
第四章	思想善導機関への改組	181
第五章	陣容の再整備過程	

第三章	正司考祺の排仏論	
第四章	平田篤胤の排仏論	
第五章	神葬祭問題	121
第六章	江戸時代の廃仏毀釈	114 108
		127

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は圭室諦成著『明治廢仏毀釈』（一九三九年、白揚社刊行）の復刻新版である。本書の書名は、諸々の廢仏毀釈論における本書の特色を明示することを意図して本書刊行書がつけたものである。

一、附録として圭室諦成著『日本佛教史概説』（一九四〇年、理想社出版部刊行）の第一五章を巻末に収めた。（『日本佛教史概説』の第一四、一六、一七、一八章は『明治廢仏毀釈』が収める記述を大体そのまま再録したところが多い。）

一、本書では左記のように表記を現代化した。

一、新漢字、新仮名遣いに置き換えて表記した。（引用文とみなすべきものの仮名遣いはそのままに表記した。）

一、著者自身の文においては、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にあるものは平仮名表記に置き換え、送り仮名を現代的に加減した。また、著者自身の文、引用文とともに読み仮名ルビを附加した。

一、著者自身の文においては、踊り字は「々」のみを使用し、それ以外は文字に戻して表記した。

一、著者自身の文においては、「いわちに」と読む「一一」など、読点を補ったところがあり、また、読点を句点に変えて文章を整えたところがある。

一、「」で括った注記は本書刊行所によるものである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsai.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

廃仏毀釈とその前史

檀家制度・民間信仰・排仏論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

あらゆる宗教は、新しい日本の現実に、即応する姿勢をとることを、要請されて居る。仏教とても、決してその例外をなすものではない。かかる時機に直面して、今私は、小著廃仏毀釈一巻を、知識人、特に青年宗教人、の机上に送るの光栄をもつ。かつて廃仏毀釈の実況は、老僧達によつて、悲憤慷慨を以て語られた。しかしかかる感情的饒舌は、少くとも現在においては、全く無意味である。吾々は虚心坦懐、排仏論、廃仏毀釈の過程を通じて示された、峻厳な批判、試煉を凝視、以て吾々の当面せる諸問題に関する教訓を、学びとらねばならぬ。すなわち社会経済的にみて、寺院、僧侶はいかなる点に弊害を釀しつつあつたか、また、仏教は、宗教としていかなる点に欠陥をもつていたかが、更に、いかなる点が非日本的とされたか、等々を反省、そして現在、吾々が、仏教を日本の現実に即応させるためには、吾等いかにすべきか、に思いを致さねばならぬ。私は、この小著が、かかる要求を、充分に満足せしめ得ることを確

信する。

まず第一部、檀家制度の重圧においては、新寺院機構の確立、江戸幕府の宗教政策、諸藩の財政と寺院、の三章に分かち、主として社会経済史的観点より、江戸時代寺院、僧侶の性格を究明、幕末の諸藩によつて、何故に寺院、並びに僧侶が、癌的存在視されねばならなかつたか、を叙述した。

次に第二部、民間信仰の繁昌、組織化においては、宗教界に現れたる新動向、宗教寄生者群の登場、修驗道の急旋回、教派神道の誕生、の四章に分かち、主として宗教史的観点より、江戸時代宗教の動向が、現世利益面にあつたこと、その限りにおいて、仏教はすでに行詰りを示していくこと、つまり仏教の現世利益面は、山伏等によつて、継承発展せしめられたこと、なおそれは、民衆が参加するに及んで、著しく日本化しつつあつたこと、それらが組織されたものが、教派神道であること、を指摘した。

第三部、排仏論の展開において、儒者の排仏論、懷徳堂の排仏論、正司考祺の排仏論、平田篤胤の排仏論、神葬祭問題、江戸時代の廢仏毀釈、の六章に分かち、第一部、第二部に述べた如き社会事情、宗教事情の中に醸釀されたる排仏論は、はじめは主として、仏教の出世間性を、ついで、その封建社会に対する重圧を、俎上にのぼせ、更に日本主義の昂揚とともに、非日本的なものとして、排撃ざるに至つたこと、かくてその内容を、著しく豊富化した排仏論は、

SAMPLE
Shift-Shirts.com

まず諸藩の当路者に歓迎され、ついで、神葬祭問題の解決に苦慮する神職の、理論的武器となつたこと、すでに江戸時代、財政窮乏に悩める諸藩は、この理論を提げ、廢仏毀釈に着手していたこと、を詳説した。

第四部、廢仏毀釈の概観においては、神仏分離令の発布、廢仏毀釈の実況、封建的領有地の整理、思想善導機関への改組、陣容の再整備通程、の五章に分かち、幕末すでに発火点に達していた廢仏毀釈が、明治維新の混乱に乘じ、全国的に波及したこと、ただしそれは、必ずしも新政府の意図ではなかつたこと、新政府の行つたものとしては、封建的領有地の整理、思想善導機関への改組、が注目すべきものであること、なお仏教自身が、新時代的に再組織されつであること、を記述した。

廢仏毀釈については、辻善之助博士、鷲尾順敬博士、その他、伊東多三郎、豊田武、阿部真琴、徳重浅吉氏等が、幾多の貴重なる研究を、公にして居られる。この問題について、全く未知な私が、とにかく一応まとめ得たのは、それら諸研究のあつたためである。謹んで敬意を表することとする。

圭室
諦成

第一部 檀家制度の重圧

第一章 新寺院機構の確立

—

中世初頭に新興した諸宗派は、社会の展開に適応する如く、その思想を発展させていた。そのことは寺院機構についてみても、また同様であった。しかしかかる適応化は、畢竟宗教自身の立場よりするものであつたことを、忘れてはならぬ。社会には社会独自の立場がある。かくて近世社会は、その基礎を確立する過程において、仏教をその独自の铸型にはめ込むことになった。以下這般の過程を、新寺院機構の発生、信長の仏教政策、秀吉の仏教政策、新寺院機構の確立、の四項に分けて略述してみる。

SAMPLE
Shoshi-chinsui.com

淨土諸宗が、その經濟的基礎として選んだのは、葬式、法事による収入であつた。しかし上層階級の葬式、法事は顕密諸宗、後には禪宗、の占めるところであったので、淨土諸宗は勢い農民の間に進出することとなつたのであるが、またそこにも障礙はあつた。勿論当時の農民の生活は、精神的にも物質的にも、恵まれた状態ではなかつた。そのことは、淨土の教を欣求するすぐれたる条件であり、死後の幸福を保証する葬式、法事の魅力を大にするものでもあつた。しかしながら国内の大部分の農民が、顕密諸宗寺院の私有地、または宗教的にその影響下にある貴族等の私有地内の農民であること、なおまたそれにもまして、彼等農民がかかる經濟的地位によつて、淨土諸宗に有利な、従つて顕密諸宗に不利な信仰を敲き込まれていたこと、等を考慮に入れるとき、淨土諸宗のもつ魅力に憧れたからと言つて、直ちに農民は動き得るものでないことが、理解されねばならぬ。しかし、次第に中世的な社会機構が破壊され、それとともに、農民に対する顕密諸宗寺院、及び貴族等の圧迫が弱まり、従つてその宗教的影響力が減退するに及んで、淨土諸宗の教義は迅速に受容れられ、従つて葬式、法事料を財源とする淨土諸宗は、漸くその經濟的危機を脱することを得た。一方中世末には、社会の解体に伴う不安が、農民の經濟生活を脅威し、かかる不安を克服するために、農民が統治者に対し抗争を開始しかかる抗争は、土一揆と称せらるる集団的運動にまで高められていた。そしてそれは、その途上に新たに、組織のための情熱と方法を必要とした。その場合、同じく農民を地盤とする淨土

諸宗の信仰及び講が、その要求を充たすに足るものとして重視された。かくて農民運動の一部は、浄土諸宗、殊に浄土真宗の伝道圏内に入つて來た。その時、政治的興奮を宗教的なものへ移行せしむることによつて、その信仰を根強く農民の間に浸潤せしめ、また信仰集団の単位としての講の組織を、鞏固ならしめたものである。かくて講と寺院、更には講の構成員としての個々の農民と、寺院との関係は、急速に緊密さを加え、いわゆる檀家制度が成立した。また寺院相互の統属関係を規定せる本末制度も、末寺は本寺を信仰及び榮誉の源泉とし、本寺は末寺を介して信者の淨財を集めるとする組織が、決定的となりつゝあることが注意されねばならぬ。要するに、浄土諸宗は葬式、法事を中心とする檀家制度を確立、更にその上に本末制度を樹立しつつあつたのである。

同じく中世初頭に新興した仏教と言つても、禅宗の経済法は、浄土諸宗のそれとは趣を異にしていた。即ち生活を切り下げる事と、そしてそれを、無条件に支持する擁護者の支弁に頼らんとするのであつた。しかし無条件の支持を俟つ限りにおいて、飢餓をも敢えて意としない熱烈な求道心を必要とする。だがしかし、それは凡僧のよく忍び得るところではなかつた。かくて禅宗も、次第に現実社会の要求に対応する形態をとることになる。ところで當時この宗に関心をもつた武士は、宗教的にはそれを菩提所兼祈禱所に改組することを希望したので、結局において、かかる方向に移行することを余儀なくされている。菩提所というのは、葬式、法事及

び墓地管理等の、一切をあげて依頼するとともに、一方寺院経営費のすべてを負担する、一家の私寺である。

顕密諸宗の場合は如何。それら宗派に属する寺院は、中世初頭には膨大な私有地をもつていたが、武士のために、それらの土地は次第に侵略された。その場合勿論、僧兵と称せらるる軍團を以つて、反撃はしたもの、すでに武士の実力には比すべくもなく、またかつては武士をも威嚇した独自の宗教的武器も、淨土諸宗の進出によつて壊滅に瀕していた。かくて守護地頭の設置、吉野時代の争乱、応仁の大乱等を、それぞれ段落として、私有地は次第に武士の手に奪われた。しかし私有地の離脱が、かくの如く徐々に行われたことは、不幸中の幸であった。何となれば、顕密諸宗は、この間に、彼等の経済法を切替うる余裕をもつたからである。かくて種々の経済法が、次々に取上げられた。しかしこにおいても、結局葬式、法事は、その王座を占むるものであつた。

要するに中世的寺院機構崩壊の中に、新社会に適応する陣容を、最も迅速に樹立したのは淨土諸宗で、禅宗これにつぎ、顕密諸宗は最も稚拙であった。しかしてかかる新陣容の中軸をなすものは、葬式、法事であつた。従つて、中世における葬式、法事の発展は、注目に値するものがある。いま法事についてみてれば、中世の初めまでは、わずかに中陰、百箇日、一周忌の法要きりで、しかも上流に限られていたのに、中世末ともなれば、現在普通に行われて居る

三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十五年忌、三十三年忌、五十年忌等の法事の型はほとんど完成し、しかも農民の間に広く行われるに至つて居る。更にこの葬式、法事を介しての寺院と武士、また寺院と農民との関係は益々緊密化し、その緊密さはすでに寺檀の関係にまで進んで居る。なおかくの如く寺院の経済が、土地を離れて檀家に依存するに至つたところに、中世的な本末制度——本寺は末寺の私有地を保護するとともに、末寺を私有地と同一視し、末寺をしてその私有地の年貢の一部、又は全部を納付せしむる組織——が破壊されて、近世的な本末制度——本寺は末寺及びその檀家の、信仰及び栄誉の源泉であるとともに、末寺を通じて檀家の淨財を集めるという組織——が成立し始めて居ることが注意されねばならぬ。

三

寺院は近世社会の発生過程において、それ自身近世的に再組織しつつはあった。しかし私どもはここで、かかる再組織には、一定の限界——それは結局宗教家という立場から離れ得ないことからする——があつて、従つてそれは、社会全体の事を考慮する政治家の意図に、必ずしも合致するものでないことを知つて置かねばならぬ。つまり近世初頭に登場した統一者、信長、秀吉、及び家康は、それ自身近世化しつつはあつたが、しかもなお社会全体の立場から見れば、多くの修正を必要とした寺院機構を、それぞれの発展段階の立場において、それぞれ新しい修正を加えて行くことに努力したのであつた。まず信長の仏教政策から述べてみる。

信長の仏教政策は一体どんなものであつたか、そのことを充分に理解するためには、当時の仏教界の情勢に、一瞥を与えて置く必要があると思う。信長の目標とするところは天下統一、そのためには、彼に対立する一切の封建的勢力を打倒することが必要である、ところで寺院は、かかる封建的勢力をもつていた。勿論当時の南都北嶺のもつ武力、経済力は実際に大したものではなく、ただ伝統的に虚勢を張つて居るに過ぎなかつた。が、かかる虚勢が、社会一般の人々から、実質以上に認められていたことは事実である。しかして統一者達の、最も怖っていたのは、一向一揆であつた。既に南都北嶺の僧兵は、その組織において、また情熱において、往時のそれと異り、全く見るべきものはなかつた。それに反して浄土真宗は、農民の信仰を集め、しかもそれら農民は、講の組織によつて、本願寺門主を最高統率者とする、整然たる封建組織によつて、統率されていたのである。この热烈な信仰と鞏固な組織は、天下統一を目指す信長にとつては、最も恐るべき敵国であつた。これを要するに信長は、仏教陣営内に二つの敵国、即ち南都北嶺と一向一揆とを発見、特に後者にその関心を集中させていたのである。かかる周囲の事情において、彼はキリストンを迎えた。しかもそのキリストンは、西国においての実例に徴すれば、今彼が焦慮している一向一揆、その地盤であるところの農民、への伝道に成功している。とすれば、彼が打倒工作の第一歩として、キリストンと握手することは必然ではないか。即ち永禄十二年（一五六九）キリストン禁制免除を奏請して居るのをはじめ、会堂の建設、